

## IATSSフォーラムの理念

岡村總吾\*

IATSSフォーラムは、財団法人国際交通安全学会が1984年秋に開始した国際交流事業である。ここには、東南アジア各国から、将来その国の指導者となる若い優秀な人材を招聘し、日本の近代化をテーマに、彼らと日本側が「共に考え共に学ぶ」という理念のもとに、3か月間のプログラムを実施している。本稿では、この理念のもとになった考え方を紹介すると共に、タイ、マレーシア、インドネシア、シンガポール4か国の現地委員会委員長の寄稿による、「IATSSフォーラムへのメッセージ」を掲載した。

### The Concept of IATSS Forum

Sogo OKAMURA\*

IATSS Forum is an international exchange program which was initiated in the fall of 1985 by the International Association of Traffic and Safety Sciences. IATSS Forum provides a three month program for promising young people who will become future leaders of their own countries. The program is aimed at studying Japan's modernization on the basic principle of "Think together, Learn together". In this paper, the basic idea which underlines the Forum is discussed. "The Messages to the IATSS Forum", written by the Chairmen of the national Committees in Thailand, Malaysia, Indonesia and Singapore are also included.

財団法人国際交通安全学会 (IATSS) は、1974年 (昭和49年) に設立されて以来、交通とその安全について多くの学際的研究を行ってきた。またその成果は国際シンポジウムなどで発表され、日本は勿論、諸外国からも高い評価を得てきた。

東南アジアにおいては、フィリピン・マニラ市における公共交通機関の調査、研究、マレーシア・クアラルンプール市で1983年12月に行われたシンポジウム (Technology Culture and Development)、タイ王国・バンコック市で1985年10月に行われたシンポジウム (Urban Traffic and Environment)、インドネシア・ジャカルタ市において1986年2月に

行われたシンポジウム (Social Perspective of Technology Development in the Process of Modernization) の開催など、いろいろの活動を行ってきた。

1984年学会設立10周年を迎えるに当って、新しい国際交流事業を発足させることとし、その事業の内容について検討を行った。その結果、東南アジア各国から、それぞれの国で将来その国の指導者になるような、若い優秀な人々を日本に招き、<近代化>をメインテーマとして<共に考え共に学ぶ場>として、IATSSフォーラムを開催することにした。

地球上のあらゆる人々が豊かで活力に満ちた生活を楽しむような社会をつくり、これを将来の子孫に引き継ぐことは、我々人類の究極の目的である。しかし地球上には、多くの異なった歴史的背景や地理的、社会的条件等を有する国家が存在し、これら世界各国の間で生活水準に格差の存在することは無

\*財団法人国際交通安全学会副会長、IATSSフォーラム塾長、  
東京大学名誉教授  
Executive Vice President, IATSS,  
Director, IATSS Forum,  
Professor Emeritus, University of Tokyo  
原稿受理 1989年7月3日

視することができない。

我国が1868年の明治維新以後、政府、国民が一体となって、科学技術を始め教育体制、社会制度等あらゆる面について、欧米先進国から学び、国の近代化に努めた結果現在の日本を築き上げることができたのである。このような我国の経験は発展途上国にとって確かに良い手本になりうるものであろう。しかしながら我国の現在の制度や技術を学んだり、その近代化の過程をそのまま導入しても、成功するとは思えない。日本の近代化は100年以上も前に、太平洋の西北に位置する小さい島国に住んでいた日本人によって行われたものである。当時の日本の社会や風俗、日本人の考え方は勿論、その文化や歴史を知らなければ、何故日本の近代化が成功したのかを理解することはできない。

また国の近代化や開発は良い結果ばかりをもたらすとは限らない。急速な科学技術の進歩の結果、大気汚染、水質汚濁、森林破壊等の環境汚染やエネルギー、資源の枯渇等の問題が生じたり、都市化による犯罪の増加や交通事故、渋滞等の弊害を生じるようになってきている。

東南アジアの国々が今後その国の開発を進めるに当っては、単に日本の産業技術や社会制度を学ぶのみではなく、日本の文化や歴史、日本人の考え方を本当に理解して、日本の成功と失敗、およびその原因について十分に検討を行い、それによって銘々の国に本当に適した開発の方法を考える必要があろう。

以上のようにIATSSフォーラムは、長期的にみて参加者の方々にとって十分お役に立つようにとの考えから計画したものであるが、これは我国にとっても大変役に立つものである筈である。ご承知の様に我国は、エネルギー、資源に乏しい国であるから、世界中の国々と親しく協力していかないかぎり、国の発展はありえない。最近の我国の政府の審議会の答申や報告に、“国際化”という文字の無いものを見出すのは困難なほどである。これは我国において国際協力が非常に必要で、国民に国際的な認識が必要であることを示すと同時に、日本人には国際的な素養が欠けていることを示すものである。我国は明治維新以前の徳川時代には300年近くの間厳しい鎖国政策をとっていたから、我々日本人には外国の人々と交際する経験が極めて乏しい。そもそも国際化の根本は、自分達と異なった文化、歴史、社会、宗教

のもとに生活して、自分達と違う考え方をし、自分達と異なる言語を話す人々の居ることを、頭脳だけでなく、身体で理解し、それらの人々と自由に交際し協力することである。

IATSSフォーラムは参加者が一方的に学ぶ場ではなく、<共に考え、共に学び合う場>であるから、鈴鹿でフォーラム参加者達と接触する日本の人々は大変な国際的な経験をうることになる。特に3ヶ月の間フォーラム参加者と共に暮らす事務局の人々は、単に口先で“国際化、国際化”と唱えている政治家やマスコミの方々よりは遙かに国際的な経験を積むことができるのではないかと思う。鈴鹿市やその近所の方々にも大変お世話になっているが、IATSSフォーラムが鈴鹿市や三重県の国際化に貢献した所もかなりあるのではないかと思う。

さて、IATSSフォーラムを計画するに当って最初に考えたことは、如何にして優秀な参加者を得ることが出来るかということであった。幸いにして、鈴鹿に立派な研修施設、宿泊施設が建設されることになった。講師陣は国際交通安全学会の理事、顧問、会員を中心として構成することができるし、必要に応じて学会関係者以外の専門家にも依頼することができるので心配はない。プログラムの内容も立派なプログラム委員会ができたので大丈夫である。問題は如何にして東南アジアの人々に周知させ、どのようにして優秀な参加者を選考するかということである。いろいろ協議の結果各国に現地委員会を設立し、学会、官界、産業界から著名な方々を選んで委員にお願いし、国内の周知方をお願いすると共に、参加者の選考にも当って頂くことにした。現在の委員会の構成をTable 1に示す。今回の特集に当っては、これらの現地委員会委員長に、それぞれの国がIATSSフォーラムに対し、どのような期待をもち、どのように評価しているかという観点から寄稿をお願いした。尚、参加希望者には、履歴書と英文の論文を提出させることにし、現地委員会で第1次選考を、実行委員会で第2次選考を、最後に現地面接による最終選考を行っている。お蔭様で現在の所、毎回非常に優秀な参加者が得られ、所期の成果が得られつつあるように思っている。

この事業を行うに当っては、各方面の非常に多くの方々にお世話になった。この機会に深甚の謝意を表したい。

## IATSSフォーラム現地委員長からのメッセージ

マレーシア

ウンクー・A・アジズ

Ungku A. AZIZ

マラヤ大学教授

IATSSフォーラムマレーシア委員会委員長

Royal Professor, University of Malaya

マレーシアでは今日まで4回、IATSSフォーラムに参加者グループを送り出している。この度、マレーシアIATSSフォーラム修了生の第1回同窓会が開かれたばかりである。マレーシアではIATSSフォーラムの考え方の全過程をある程度まで実現できるようになった。

同フォーラムの当初の構想から初期の計画段階を通して、筆者は同フォーラムに関与してきたことを光栄に思っている。マレーシア国内委員会の委員長として、筆者はマレーシアからのフォーラム参加者の選考に直接携わってきた。そして今、誕生したばかりのマレーシアIATSSフォーラム同窓会とともに今後の発展の道を歩んでいくことができ、こうしたことすべてによって非常に満足のいく経験が得られている。原案の一つの要素とは、公立、私立を問わず教育分野で将来を約束された青年たちが日本の

家庭、学校、工場などへの実際の滞在体験はもとより、かなり徹底的に講義を聞き、書物を読み、VTRを観ることによって、日本や日本人の生活様式について学べるようにすることであった。

IATSSフォーラム参加者が日本の経済や歴史などに関する有用な知識を蓄積するだけでなく、更に重要なこととして、彼らが日本に対する新しく、より豊かな展望を形作ることが期待されていた。

日本に滞在し、日本を理解するために計画された他の短期プログラムについて、筆者はかなり限られた知識しか持っていないかもしれないが、IATSSフォーラムはその目的と実行性の点が極めて素晴らしいものであると信じている。

ASEANの立場から、筆者は同地域の参加者の様々な規範意識や社会的慣行へのきめ細かな対応に対して、岡村總吾教授の巧みな指導下にあるフォー

Table 1 IATSSフォーラム委員会 (1989年6月末現在)

	実行委員会	マレーシア委員会	タイ委員会
委員長	岡村總吾 IATSSフォーラム塾長 国際交通安全学会副会長 東京大学名誉教授	Ungku A. AZIZ マラヤ大学教授	Sanga SABHASRI 科学技術エネルギー省常任次官
副委員長	森田 孝 国際交通安全学会顧問 大阪大学人間科学部教授	Ahmad NAWAWI マラヤ大学理学部教授	Kasem SNIDVONGS 科学技術エネルギー省常任次官補
委員	野口 薫 国際交通安全学会会員 千葉大学教養部教授  太田勝敏 国際交通安全学会会員 東京大学工学部助教授  齋田 実 国際交通安全学会理事 本田技研工業㈱取締役  鈴木辰雄 国際交通安全学会常務理事	Abdul Malek bin Abdul Aziz 総務庁副長官  Nasrun bin MASJIDIN ジョホール州教育局高等教育事務官  Robert WONG 文秀有限公司社長  Akira IKEDA 在マレーシア日本国大使館 一等書記官 広報文化センター所長	Pravit RUYABHORN 環境委員会事務局長  Pakit KIRAVANICH 科学技術エネルギー省常任次官補  Hideo MATSUDA 在タイ日本国大使館二等書記官  Arthorn SUPHAPODOK 環境委員会事務局次長  Michiro KITAMURA アジアホンダモーター㈱社長

ラム主催者に謝辞を述べたい。柔軟性と敏感さを損なわないようにして、プログラムに順次好ましい学習環境を作り上げてきた融通性のある論理をフォーラムは実現することができた。

では、フォーラムがこれまでに達成してきた成果とはどのようなものであろうか。

われわれは素晴らしい計画を作り、申し分のないカリキュラムを設計してきた。それらは十分に実行されている。参加者は3か月の短期間に整然とした気持ちで多くの知識と豊かで新鮮な経験を身に着けている。

これまで行われたことはすべて完全な成功を収めたと断言できよう。

今日、フォーラム修了生を観察し、彼らが修得した知識がどの程度地域に移転されているかを調査することができる。また、日本の精神の断片がどれくらい吸収されたかを調べるのも興味深いことであろう。

彼らの何人かを観たところ、彼らが日本についてより多くの情報を学んだだけでなく、一層重要なことには日本人に対する態度がより積極的にかつ有効になっていることが分かった。ある国とその国民に

ついて多くのことを知れば知るほど、ますますその国、国民を評価し、友好の気持ちを強めるようになるのは真実である。

連日余りにも多くの講義をこなさなければならないという、参加者の負担を軽減するため、IATSSフォーラム主催者がカリキュラムに一定の変更を考慮していることをここに記せるのは幸いである。幾つかの項目が変更されるかもしれない。IATSSフォーラムニュースで参加者の小論を読むのはいつも楽しいものである。

この計画の注目すべき長所の一つは、参加者が各自の国に戻ってから、何らの義務も負わされていないということである。言い換えれば、ヒモ付きでないということである。IATSSフォーラム修了生は自らの新しい経験を携え、世界へと送り出される。修了生が自己の知見を広め、日本の事柄に関心を持ち続け、そして各々の国で日本人との交流を深めるならば、その時この計画の究極的な目的が達成されたといえるだろう。

これまで見てきたことから、われわれは然るべき忍耐力を持って、これらの崇高な目標が実現される時が来るのを待つべきだ、と確信する。

インドネシア委員会	シンガポール委員会	プログラム委員会	国際諮問委員会
Sayidiman SURYOHADIPROJO インドネシア科学技術開発大臣顧問	Andrew G. K. CHEW 人事院総裁	太田勝敏 国際交通安全学会会員 東京大学工学部助教授	各委員会委員長によって構成される
Wardiman DJOJONEGORO 技術評価・応用庁次官	HUANG Hsing Hua シンガポール国立大学副学長	小林 實 国際交通安全学会次席研究員 安田火災海上保険㈱顧問	
Sediono M. P. TJONDRONEGORO インドネシア科学技術開発大臣補佐	LEE Chiong Giam 人民協合理事長	鈴木春男 国際交通安全学会会員 千葉大学文学部教授	
Saparinah SADLI インドネシア大学心理学部教授	George ABRAHAM シンガポール商工会議所連盟 事務局長	荻原眞子 国際交通安全学会会員 東京国際大学教養学部助教授	
Ridwan GUNAWAN アストラ財団理事	Kagefumi UENO 在シンガポール日本国大使館公使	青木正喜 国際交通安全学会会員 成蹊大学工学部教授	
Hiroto YAMAZAKI 在インドネシア日本国大使館 一等書記官		飯田恭敬 国際交通安全学会会員 京都大学工学部教授	
Bambang W. KOESOEMA 国会議員		詫間晋平 国立特殊教育総合研究所 教育工学研究部長	

## IATSSフォーラム現地委員長からのメッセージ

タイ

サンガ・サバシリ  
Sanga SABHASRI

タイ科学技術エネルギー省常任次官  
IATSSフォーラムタイ委員会委員長  
Permanent Secretary, Ministry of Science,  
Technology and Energy

1985年10月の「都市交通と環境問題」に関する国際シンポジウムがバンコックで開催された後、タイIATSSフォーラム委員会が設立され、筆者が委員長に就任した。それ以来、同委員会はIATSSフォーラムに毎回参加者グループを選出しており、現在1990年度のフォーラムに向けて選考を進めている。

タイ委員会は、フォーラム参加希望者やフォーラムに関心のある人々からの多くの質問にも答えてきた。主な質問は、なぜ「奨学金」が支給されるのか、参加者は何を求められるのか、主催者は参加者に何を期待しているのか、というものである。応募者の中には、IATSSの名称とIATSSフォーラムを結び付けて考え、交通とその安全に関して特別の訓練を実施するようプログラムの変更を求める者もいた。しかしながら、ほとんどの組織でIATSSフォーラム修了生の人数が増え、彼らが同僚に対して正確な情報や目的を教えだすにつれて、この種の質問は少なくなってきた。最近の応募状況を見ると、応募者の水準が高まり、IATSSフォーラムがどのようなもので、これに何を期待できるかということがより明確になってきており、極めて積極的な反応がうかがわれる。

人間の常として、だれしも工業技術のような未知のものを畏敬し、見知らぬ人間集団と出会い、ともに生活することにさえ恐れを抱く性向がある。タイ人は、自動車、電気機器やその他の消費材のような工業製品によって日本を知っており、常に日本人を意志の強い勤勉な国民と見ている。君主性が国民の心一つにしているのはもちろんのこと、その礼儀正しさや、目上の人への尊敬心といったことで、日本とタイの文化はよく似ている。このことは、一人の日本女性の生涯を扱ったテレビドラマ「おしん」に、タイの人々が完全に心を奪われ、タイのテレビ史上最高の視聴率を収めたことからもうかがい知れる。

しかしながら、タイの人々は日本人と接する時、今なお距離を保ち続けている。それは一つには言葉

の壁によるものであり、また日本が高度な工業技術を持つ近代国家の典型で、タイ人が目標として努力している国家である、という理由による。

タイ人と日本人の間にある垣根を取り払うには、人々自らが互いの生活様式、労働、そして最も重要である考え方を完全に理解しあうことが必要である。タイの将来の指導者や科学者、教育者が日本の生活習慣を学ぶことのできる機会はIATSSフォーラムを除いて他にない。

IATSSフォーラムに参加した青年たちが成長し、出世するにつれて、そこで得たものはいずれ現実のものになるであろう。参加者のフォーラムに対する提言や意見はもちろん、タイフォーラム同窓会設立案も望ましいことである。各グループとも日本で親密になった関係をそのまま維持している。参加者たちが数年前に日本で得た経験が今もって彼らの考え方や言動に強い影響を与えているのは驚くべきことである。

だれもが将来に期待しているように、タイの人々はフォーラム参加者が自分の関わる仕事の利益になるよう自己の経験と日本人についての理解を活用し、さらに他の人々にその考え方を紹介することを望んでいる。このことは非常に重要な問題であると思われる。その理由は、タイと日本はこれまで以上に親密になってきており、工業技術分野で強い協力を必要としているからである。開発や工業技術で新たな接触が行われるときにありがちな不信感や不安を抱くことなく、互いを知り、友人として見、互いの意見や生活、労働についての考えかたを理解しあうことは極めて重要である。

そのような目標が達成されるには、いまだ少し時間がかかるかもしれない。しかし、フォーラムはその速度を増している。率直に言って、フォーラムおよび修了生自身によってこれまで達成されてきたことに非常に満足している。そして、あらゆるレベルでのタイ・日本両国のよりよい協力という点で、来たべき年に実り多いことを期待している。

## IATSSフォーラム現地委員長からのメッセージ

## インドネシア

サイディマン・スリョハディプロヨ  
Sayidiman SURYOHADIPROJO

インドネシア科学技術開発大臣顧問  
IATSSフォーラムインドネシア委員会委員長  
Adviser to the Minister of Research and Technology

今日の世界では、高価な代償を支払わずに孤立することができる国家はない。米国とソ連のように、社会および政治体制で相対立する国でさえ、同時に協力し、競争しているのである。

他国に攻撃された場合は別として、独自の国家哲学である「パンチャシラ (pancasira)」に裏打ちされたインドネシアの基本的姿勢は、繁栄と世界平和を促すために他国と協力することである。この枠組みの中で、インドネシアは日本を含む他のアジア諸国と緊密で健全な関係を築き、維持するよう常に努力している。しかし、他国と親密で健全な関係を築くことは、相互に十分な理解と認識がある場合にのみ可能である。

したがって、日本と良好な関係を持つためには、インドネシア人の大部分が日本や日本の歴史、日本人とその行動の背後にある動機について十分知らなければならない。日本がまたインドネシアと良好な関係を持つことに関心があるのならば、同様のことが日本にも言えるだろう。インドネシア社会のあらゆる分野の指導者や将来の指導者が、日本や日本の過去、そして将来の動向について熟知することは特に重要である。そして、それはわれわれがIATSSフォーラムへの参加を決定した際に期待したことの一つである。そこで行われる講義や教育によって、インドネシアの参加者に日本がどういう国であり、今後何をしようとしているのかということに関して、広くかつ深い見識を与えられることを期待する。

同時に、適切に選出されたインドネシアからの参加者が同フォーラムに出席することで、鈴鹿や他の場所で日本の人々にインドネシアを紹介できるであろう。周知のごとく、ほとんどの日本人は残念ながらインドネシアについてよく知らないからである。

もう一つの重要な点は、インドネシアは以前の植民地国から近代的で豊かな国へと発展する過程にある、ということである。

しかし、インドネシアはこの近代化の過程で自国のアイデンティティーを喪失したり、犠牲にすることを望んではいない。近代化は西洋的価値の移植としばしば密接に関係しており、それによって土着の

アイデンティティーが危険にさらされるようになる。日本の歴史は、西洋から近代科学、工業技術などの能力を獲得する一方で、自国のアイデンティティーを維持し保護できるということを証明した。今日、日本は近代工業技術において西洋と同等の、あるいはそれをしのぐ高度に発展した工業国家として注目を浴びている。しかし、同時に日本はあらゆる伝統的特徴と態度を今なお持ち続けているのである。

したがって、われわれはどのようにして自国のアイデンティティーを保護しながら、近代化を達成したかということをも日本から学びたい。高等教育を受けた参加者は、日本が大成功を収めた理由と方法を探究できるはずである。滞在期間はわずか3か月とはいえ、IATSSフォーラム講師として、優れた日本の学者と出会うことをうまく利用してこのような知識を求めることができる。

インドネシアはすでに3グループを修了し、1989年5月末には第4のグループが日本に向けて出発した。確かに改善の余地は多いが、既に多くのものが獲得されたということができる。最初のグループが帰国した際、彼らはIATSSフォーラムでの経験で興奮していた。彼らはまた、その組織の不十分さや欠点、失望した科目を報告し、それらはすぐに日本に伝えられた。そして2回目にはそれらはすでに改善されていたことによって、第2のグループはより多くのことを修得できた。3回目についても同様の経過があった。今回のグループは過去のグループに比べて、また新たな進歩があることを確信している。

IATSSフォーラムに関する情報を適切に伝えることは、参加者の選考を改善するのにも役立った。政府や民間のいくつかの分野からも参加者があり、より多くの人々が第1次選考に関わっている。参加者の総数が18人に制限されてからというもの、選考はますます難しくなってきた。質の高い参加者を選出することによって、IATSSフォーラムに対する期待をもっと実現することができるようになるだろう。

そして、次回のIATSSフォーラム参加者に選ばれることを、より多くのインドネシアの志願者たちは心待ちにしている。

## IATSSフォーラム現地委員長からのメッセージ

シンガポール

アンドリュー・チュー  
Andrew CHEW

シンガポール人事院総裁  
IATSSフォーラムシンガポール委員会委員長  
Permanent Secretary, Public Service Division,  
Ministry of Finance

IATSSフォーラムの格別の魅力は、戦後日本の経済的奇跡に関連付けて考察されなければならない。資源の乏しい国がどのようにして唯一の資源である国民の力を利用し、優れた工業技術の獲得に向けて努力したのであろうか。日本はこの現代のサクセスストーリーを実現したのだ。

日本が成し遂げたことはシンガポールに多くの点で示唆を与えて来た。我国は天然資源を一切持たない小国である。その歴史の大部分は貿易および通商の中心地としてであったので、ゼロから工業化を始めなければならなかった。ますます競争がはげしくなる世界で成功を収めるには、限られた人的資源を最大限に活用する必要があった。そして、生き残るためには他国民よりも効率的に物事を行い、試行錯誤することなく即座に決断しなければならなかった。我国には一つの過ちを犯す余裕も許されなかったからである。

シンガポールは、優れた工業技術と高い生産性の獲得に成功した諸国から常に熱心に学んできた。日本は、決意が固く順応性のある国民がいかんにして立ち上がり、挑戦し、自然的悪条件を克服したか、という素晴らしい手本である。

IATSSフォーラムは、日本、シンガポール2国間の相互理解を築くことはもちろんのこと、知識移転の懸け橋として更に重要な働きをしている。急速な工業化の持つ社会学的意義は見過ごされることが多く、あるいは少なくとも当然受けるべき注目を受けて来なかった。アジア社会に基礎をおく事例研究を入手するのは更に困難である。

近代的進歩は、われわれの生活様式、労働習慣、そして個人、家族や国家までもが相互に作用し関係する基本的習慣を変化させる。これに対してアイデンティティーを保ち、変化の力をシンガポール社会全体の利益に向ける努力が今こそ必要である。そうしなければ、我国は長期にわたる破滅的な結果に苦むことであろう。

日本には近代化の圧力から生じたいくつかの社会問題が存在してきた。日本がどのようにしてこれらの問題に取り組んで来たかということは、我国にとって大いに関係のある問題である。

したがって、我国のIATSSフォーラム参加者に、以下の見解を携えて赴くことを期待する。

- 日本の文化、思想、価値のよりよい認識。つまり日本人が自分の仕事に卓越さを求め、組織目標を達成するためにチームとして働く動機が何であるかをより完全に理解すること。
- 日本がどのようにして急速な工業化への戦略を綿密に計画し、工業技術革新の最前線に進み出たか。
- どのようにして教育、価値教育、職業倫理および労働システムを、日本人労働者の生産性を最高レベルに上げることに結び付けたか。
- 政府が果たした役割。例えば、日本の経済発展における経済計画、調査研究および開発の奨励。

我国のIATSSフォーラム参加者は、政府機関、市民組織、民間企業の出身者である。彼らは若く、前途有望な最適格者である。彼らがシンガポール社会の将来を形作るうえで重要な役割を担うことを確信している。

日本がいかんにして高度経済成長の過程での諸問題を克服したかを十分に理解することによって、我国のIATSSフォーラム参加者は自国が取るべき最も有効なアプローチと、今世紀末迄に工業国の地位を得ようとする余りに陥る落とし穴を避けることを指示するのに役立つであろう。これまで、シンガポールが参加したIATSSフォーラムは1回のみであるが、我国とマレーシアの2国共同参加によるIATSSフォーラムはまたこれ1回のみである。すでに情報のフィードバックは促進されている。われわれは我国の若く才能豊かな専門家たちが、より多く今後のIATSSフォーラムに参加することを確信している。